『開目抄』に現われた一念三千義について㈡

桑名貫正

一　はじめに

本稿は『棲神』第六六号に掲載した「『開目抄』に現れた一念三千義㈠」[1]の続篇である。一念三千とは端的にいえば、仏に成れる原理である。一念三千の認識・研究の上から考えれば、『開目抄』の冒頭文である「夫一切衆生の尊敬すべき者三あり。所謂主・師・親これなり」（定五三五頁）[2]の一切衆生の尊敬すべき者の主師親が本尊に通じるもの、つまり成仏と密接なる関係があると考えれば、これまた一念三千義を有するものといえよう。この点については⑨の文にて論じたい。その主師親の三徳を兼備した本尊を見極むゆえに儒・外・内を尋究した結果、本門の教主釈尊となった。そして一切経の中で法華経だけが釈尊の正言であり、三世十方の諸仏の真言であることを日蓮聖人は主張される。仏に成れる原理の一念三千は、ただ寿量品の文底のみにあることは既に論じてきたところである。これらのことを含めて前回は、『開目抄』中に見られる一念三千の名目二十箇所あるうち、序分に相当する⑤の文までの一念三千義に関する展開について検討を行った。今回は、本論にあたる⑥の文からその一念三千義の考察を試みるものである。考察にあたって、重複の感はあるが便宜上、『開目抄』の中で一念三千がどこのどこにでているのか、その名目箇所を挙げて、そして一念三千義がどのように論じられているのかを検討したい。

二　『開目抄』の一念三千の記述箇所

① 一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり。龍樹天親知て、しかもいまだひろいいださず。但我が天台智者のみこれをいだけり。（定五三九頁）

② 一念三千は十界互具よりことはじまれり。法相と三論とは八界を立て十界をしらず。況や互具をしるべしや。（定五三九頁）

③ 善無畏三蔵・金剛智三蔵、天台の一念三千の義を盗（ミ）とて自宗の肝心とし、其上に印と真言とを加て超過の心ををこす。（定五四一頁）

④ 其の子細をしらぬ学者等は、天竺より大日経に一念三千の法門ありけりとうちをもう。（定五四一頁）

⑤ 華厳宗は澄観が時、華厳経の心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偸（ミ）入（レ）たり。人これをしらず。（定五四一頁）

⑥ 此等の経々に二（ツ）の失あり。一には存（スル）二行布一（ヲ）故仍未（ニ）レ開（ホタ）レ（セ）権（ヲ）。迹門の一念三千をかくせり。二には言（フ）二始成一（ヲ）故曽未（ヲ）レ発（セ）レ迹（ヲ）。本門久遠をかくせり。此等の二（ツ）の大法は一代の綱骨・一切経の心髄なり。（定五五二頁）

⑦ 迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一（ツ）を脱（のがれ）たり。（定五五二頁）

⑧ しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮（ウ）るにたり。（定五五二頁）

⑨ 本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹

門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顕ず。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。（定五五二頁）

⑩ 法華経方便品の略開三顕一の時、仏略して一念三千心中の本懐を宣給。始の事なればほととぎすの音をねをびれたる者の一音きゝたるがやうに、月の山の半を出たれども薄雲のをほへるがごとくかそかなりしを、舎利弗等驚て諸天龍神大菩薩等をもよをして、諸天龍神等其数如二恒沙一。求レ仏諸菩薩大数有二八万一。又諸万億国転輪聖王至合掌以二敬心一欲レ聞二具足道一等は請せしなり。文の心は四味三教四十余年の間いまだきかざる法門うけ給はらんと請せしなり。（定五六九頁）

⑪ 華厳・方等・般若・深密・大日等の恒河沙の諸大乗経は、いまだ一代肝心たる一念三千大綱骨髄たる二乗作仏久遠実成等いまだきかずと領解せり。（定五七一頁）

⑫ 法華経の種に依て天親菩薩種子無上を立たり。天台の一念三千これなり。（定五七九頁）

⑬ 華厳経乃至諸大乗経・大日経等の諸尊の種子皆一念三千なり。天台智者大師一人此法門を得給えり。華厳宗の澄観、此義を盗て華厳経の心如工画師の文の神とす。（定五七九頁）

⑭ 真言大日経等には二乗作仏・久遠実成・一念三千の法門これなし。（定五七九頁）

⑮ 善無畏三蔵震旦に来て後、天台の止観を見て智発し、大日経の心実相我一切本初の文の神に天台の一念三千を盗入て真言宗の肝心として、其上印と真言とをかざり、法華経と大日経との勝劣を判ずる時、理同事勝の釈をつくれり。両界の曼荼羅の二乗作仏・十界互具は一定大日経にありや。第一の誑惑なり。故伝教大師云新来真言家則泯二筆受之相承一旧到華厳家則隠二影響之軌模一等云云。（定五七九）

⑯ 龍女が成仏此一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらわす。法華経已前の諸小乗経には女人成仏をゆるさず。諸大乗経には成仏往生をゆるすやうなれども、或改転の成仏、一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。挙一例諸と申て龍女成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし。(定五八九―九〇頁)

⑰ 又仏になる道は華厳唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪観等も実には叶べしともみへず。但天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。(定六〇四頁)

⑱ 此一念三千も我等一分の慧解もなし。(定六〇四頁)

⑲ 而ども一代経々の中には此経計一念三千の玉をいだけり。余経の理は玉ににたる黄石なり。沙をしぼるに油なし。石女に子のなきがごとし。諸経は智者猶仏にならず。此経は愚人仏因を種べし。不求解脱解脱自至等云云。(定六〇四頁)

⑳ 設山林にまじわって一念三千の観をこらすとも、空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機をしらず、摂折の二門を弁へずば、いかでか生死を離べき。(定六〇七頁)

三 『開目抄』中の一念三千義の展開

一念三千の記述箇所であるところの⑥の文の前に、一念三千義に関する論及が幾つか見られる。左の内容も、その内の一つである。

此に予愚見をもて前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに、其相違多といえども、先世間の学者もゆるし、

我が身にもさもやとうちをぼうる事は二乗作仏・久遠実成なるべし。（定五四二頁）

右の引用文は『開目抄』の本論、正宗分の冒頭文である。天台宗の学者と日蓮聖人自身も、爾前経と法華経との相違の根本的な問題は二乗作仏と久遠実成の有無にあると見られたのである。この二乗作仏と久遠実成の二箇の大法こそは、実は一念三千の根幹の義にあたる法門と指摘する。この事は『開目抄』の一念三千の記述箇所である⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑭の文にて明瞭に論述展開がされており理解できよう。その論述内容の骨子は、一念三千に二箇の大事ありと捉えて、所謂、迹門の一念三千は二乗作仏・本門の一念三千は久遠実成が中心課題であることが述べられているのである。

さて『開目抄』の正宗分の冒頭文から⑥の一念三千の文に至るまでその流れを見ると、一念三千の根幹義たる㈠二乗作仏と㈡久遠実成との問題を爾前経と法華経とに相対されて論じられている。その方法は次に示す如くである。

㈠　二乗作仏問題は、爾前経では否定されていた。そこで仏弟子がなぜ成仏できないのか、その理由が論じられていく。その理由を証明する具体的な方法は『華厳経』[3]、『大集経』[4]、『維摩経』[5]、『方等陀羅尼経』、『大品般若経』、『首楞厳経』、『浄名経』等の文[6]を挙げて展開されている。法華経では逆に二乗作仏を肯定するのである。法華経における二乗作仏の証明典拠として、見宝塔品・神力品、嘱累品の文を挙げて論述されている。[7] しかし、この二乗作仏を肯定する法華経は仏在世から難信難解の経典とされているだけに、滅後、ましてや末法に於ては法華経を信ずることの難しさが縷縷述べられている。この様な経過を踏まえられて左の文の表明が見られるのである。

日蓮云、日本に仏法わたりてすでに七百余年、但伝教大師一人計法華経をよめりと申をば諸人これを用ず。但法華経云若接須弥擲置他方無数仏土亦未為難。乃至若仏滅後於悪世中能説此経是則為難等云云。日蓮が

強義経文には普合せり。（定五四九頁）

賢王の世には道理かつべし。愚主の世に非道先をすべし。聖人の世に法華経の実義顕るべし等と心うべし。（定五四九―五〇頁）

右の「日蓮が強義経文に普合せり」「法華経の実義顕る」表現に一念三千義が汲み取れるのである。「日蓮が強義」つまりこれまで命懸けで行ってきた強い主張は、日蓮聖人御自身の体験上（色読）からの発言で実に経文と一致する行動の有様は、正に聖人の事の法門がありと覚える。この経文普合とは宝塔品の六難九易を指しているから、『開目抄』の翌年に発表された『顕仏未来記』（真蹟完）の「但今如レ夢得二宝塔品心一」（定七四二頁）の文と通ずるものがある。「法華経の実義顕る」の実義とは、前回で論述した一念三千を形容するところの「天台の深義」（定五四二頁）に他ならない。[8] 従って一念三千義が論述されている文として見ることが可能である。又、次の

此法門は迹門と爾前と相対して爾前の強きやうにをぼゆ。もし爾前つよるならば舎利弗等の諸二乗は永不成仏の者なるべし。いかんがなげかせ給らん。（定五五〇頁）

とある「此の法門」とは、二乗作仏は法華経に限るという法門である。『開目抄』では舎利弗等の二乗が「いかんがなげかせ給らん」の文のところで、一念三千義の二乗作仏中心の問題は終り、次の久遠実成にテーマが移るのである。

㈡　久遠実成の問題。久遠実成の問題が述べられる前文に、左の文が見られる。

法華経の正宗略開三広開三の御時、唯仏与仏乃能究尽諸法実相等、世尊法久後等、多宝仏迹門八品を指て皆是真実と証明せられしに何事をか隠べき。なれども久遠寿量をば秘せさせ給て、我始坐二道場一観レ樹亦経行等云云。最

第一の大不思議なり。（定五五一頁）

法華経方便品第二の略開三・広開三については、後述する一念三千記述箇所の⑦の文のところに於て触れたい。今、涌出品の六万恒河沙の本化地涌の大菩薩達が釈尊に弟子の礼をとったのに対して弥勒菩薩が疑を抱いた。その疑を解くために初めて久遠実成の開顕がなされるのである。

教主釈尊此等の疑を晴さんがために寿量品をとかんとして、爾前迹門のきゝ（所聞）を挙云　一切世間天人及阿脩羅皆謂今釈迦牟尼仏出釈氏宮去伽耶不遠坐於道場得中　阿耨多羅三藐三菩提等云云。正此疑答云然善男子　我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫等云云。華厳乃至般若・大日経等は二乗作仏を隠のみならず、久遠実成を説かくさせ給へり。（定五五一―二頁）

右の文には、本門の久遠実成と迹門の二乗作仏の対決が見られる。「然善男子我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫等云云」の文は開迹顕本の最初の文にあたる。これより以後の『開目抄』の展開は、暫くその本門と迹門の対決を論じながら久遠実成の問題を中心に説示されている。それは『開目抄』の一念三千の記述箇所である⑥⑦⑧⑨⑩等の文に、本門の久遠実成と迹門の二乗作仏との対決展開が次第に鮮明に論じられていく過程を見ることによっても明らかなことである。さて⑥の文に戻ろう。

⑥の文には、『開目抄』の一念三千記述箇所に於て初めて「迹門の一念三千」という表現が見られる。それは、左の文に

華厳乃至般若・大日経等は二乗作仏を隠のみならず、久遠実成を説かくさせ給へり。

此等の経々に二の失あり。一には存行布故仍未開権。迹門の一念三千をかくせり。

二には言ヲ始成ニ故曽未レ発レ迹。本門ノ久遠をかくせり。此等の二ノ大法は一代の綱骨・一切経の心髄なり。（定五五二頁）

日蓮聖人遺文中には「一念三千」の記述表現は佐前佐後にも随所に述べられるところであるが、この「迹門の一念三千」との用例を言われたのは『開目抄』以前において文永八年五月作『十章鈔』（真蹟六紙）の次の文の一箇所がある程度である。（佐前の一念三千の記述表現は見様によって殆んど天台の一念三千を指すものと考えられようが）

一念三千と申事は迹門にすらなを許されず。何況爾前に分たえたる事なり。一念三千の出処は略開三之十如実相なれども、義分は本門に限。爾前は迹門の依義判文、迹門は本門の依義判文なり。但真実の依文判義は本門に限レ べし。（定四八九頁）

その他、しいて挙げるならば『開目抄』以前とするかの問題も残ろうが系年を文永年間とする「新断簡三四八」（真蹟二紙）に、[9]「迹門の一念三千」の用例が見えるのみである。また、『開目抄』以後に於ても「迹門の一念三千」の表現記述は『四條金吾殿御返事』『観心本尊抄』等の五書[10]にしか見られないので、『開目抄』に於ける展開内容は一念三千を理解する上で重要なる掛かり合いをもつものといえよう。

⑥の文の内容をいうと、日蓮聖人は妙楽大師の『法華玄義釈籤』巻十九（大正蔵経三三・九五〇頁中）を引かれ、爾前経には二つの欠陥があることを触れられている。(一)には、迹門の一念三千を述べないから二乗作仏を認めない欠点があることを挙げている。(二)には迹門の始成正覚の仏だけを述べていて、本門の久遠実成釈尊を説かない欠点をいうのである。この(一)二乗作仏(二)久遠実成の大法を日蓮聖人は釈尊の一代の綱骨（教相）、一切経の心髄（観心）であると見られているのである。そして、その心髄であるところの一念三千は法華経の本門寿量品に来て、はじめて言え

るのだということを⑧⑨の文等で説示されているのである。

⑦迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。（定五五二頁）

⑦の文は、迹門の一念三千の内容を述べられたものである。これは、一念三千と二乗作仏の関係が論じられており、迹門の一念三千は二乗作仏を説くというのである。この一念三千の出処は先きに述べた『十章鈔』（真蹟六紙）の「一念三千の出処は略開三之十如実相」（定四八九頁）であると説示された方便品の文にある。『開目抄』にも「法華経の正宗略開三広開三の御時、唯仏与仏乃能究尽諸法実相等」（定五五一頁）と示すが、この「十如実相」について日蓮聖人は後年、『太田左衛門尉御返事』に次の様に簡潔に説かれている。

此方便品と申は迹門の肝心也。此品には仏、十如実相の法門を説て十界の衆生の成仏を明し給へば……[11]

と。また関連して、『始聞仏乗義』（真蹟完）には、実相の内容を活釈して次の様に説示されている。

法華経唯仏与仏乃能究尽爾前灰身滅智二乗押二煩悩業苦三道一　説二法身般若解脱二乗還作仏。菩薩凡夫亦如レ是釈也。[12]

右の引用遺文を挙げたのは、方便品の略開三顕一の内容を示す「十如実相・唯仏与仏乃能究尽等」の文には、成仏の原理である十界互具論が説かれているからである。その理論に立って二乗作仏等が始めて可能になり得るのである。[13]また、十如実相を更に詳しく述べる広開三顕一の「開示悟入の仏知見」の立場に由って説示されている遺文には『祈祷鈔』（真蹟身延曽存）、『観心本尊抄』（真蹟十七紙完）等を挙げることができる。[14]

法華経の方便品の略開三顕一の時、求レ仏諸菩薩、大数有二八万一。又諸万億国転輪聖王至　合掌以二敬心一欲レ聞二具足道一と願しが、広開三顕一を聞て、菩薩聞二是法一疑網皆已断と説せ給ぬ。（定六七一頁）

『開目抄』に現われた一念三千義について(一)（桑名）

右の『祈祷鈔』の文よりも広開三顕一の内容を具体的に示しているのが次の『観心本尊抄』の十三番問答、十界互具論の文である。

問曰　法華経何文。天台釈如何。答曰　法華経第一方便品云　欲レ令三衆生開二仏知見一等云云。是九界所具仏界也。（定七〇四頁）

又、十八番答にも広開三顕一の文を以て十界互具論が次のように述べられている。

経文分明十界互具説レ之。所謂欲令衆生開仏知見等云云。天台承二此経文一云　若衆生無二仏知見一何所二開悟一。若貧女無二蔵何一所レ示也等云云。（定七〇九頁）

以上、前述してきた如く⑦の文は、法華経方便品で迹門の一念三千、略開三顕一の諸法実相・十如実相・乃能究尽等、広開三顕一の仏知見の開示悟入が説き顕され十界互具論の立場から二乗作仏が可能となる。このことにより、法華経の迹門に於て爾前経の一つの欠点が消えたというのである。⑦の迹門の一念三千の文に対し、次の⑧⑨の本門の一念三千の文には、本迹を含めた法華経の絶体の一念三千が述べられている。これらには、一念三千の本迹問題（対決）が論じられているところである。

⑧しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにたり。（定五五二頁）

⑧の文には、本門の一念三千を「まことの一念三千」といっている。「まことの一念三千」とは、何かというと。先きの②の文で「一念三千は十界互具よりことはじまれり」（定五三九頁）と言われているので、一念三千は十界互具があって初めて成立するわけであるから、従って⑧の文では、まことの十界互具が説明されている。発迹顕本の最

初は、前述した寿量品の次の文である。

然善男子　我実成仏已来無量無辺百千万億那由佗劫等云云。（定五五二頁）

そうすると迹門方便品の十界互具は、本門の寿量品で発迹顕本・久遠実成が開顕されなければ本当の十界互具とはならないのである。それは、迹門に顕れた釈尊には、始めて仏と成った義が述べられているので、「仏界は始めて出来たのか？」「今まで以前は九界しかなかったのか」「仏界はつけたりか」という問題が生じて、十界互具が成立しなくなっているのである。そこで、迹門方便品に一念三千・二乗作仏の原理を説き十界互具論の十如実相を説示し、また、開示悟入の仏知見を説き顕し二乗作仏の可能性を唱えたとしても本門の一念三千の立場から見ると、迹門方便品に説示されている内容だけでは本当（真）の開示悟入とは言えないというのである。従って、いくら迹門に一念三千を説くと言っても「仏界がつけたし」という問題から、十界がバラバラな為に昔から十界互具があるとは言えないのである。このことから想起されるのは先きに挙げた『十章鈔』の「一念三千の出処は略開三之十如実相なれども義分は本門に限る。……迹門は本門の依義判文なり。但真実の依文判義は本門に限るべし」（定四八九頁）の文である。本門の寿量品に来て、久遠実成が説き顕され、そこに真の十界互具の成立が可能となることが始めて言えるのである。一念三千（成仏の原理）は、久遠実成が開顕されてこそ、まことの一念三千となり、二乗作仏もハッキリして来ると言うのである。この点から、迹門では生死を離れることはできない。生死は必らず本門に至ってはじめてできるということを主張された。文永二年四十四歳作の『薬王品得意抄』（真蹟十紙断）の左の文の意味がイキイキと理解されることができるのである。

爾前如レ星法華経迹門如レ月寿量品如レ日。寿量品時迹門月未レ及。何況爾前星。夜星時月時衆務不レ作。夜暁必

作二衆務一。爾前・迹門猶生死難レ離。至二本門寿量品一必可レ離二生死一。（定三四〇頁）

『開目抄』の⑧の文は、『薬王品得意抄』の本迹相対の内容よりも具体的に真の十界互具の立場から迹門の一念三千と本門の一念三千（まことの一念三千）との相違を認識することができる。

また、「水中の月を見るがごとし」（定五五二頁）の水中の月とは、後文に『法華玄義』巻七・十三丁の「天台不レ識二天月一但観二池月一」（定五五三頁）の文を引用しているから、天月に対する水月である。天月は、「まことの一念三千」を形容し、水月は迹門の一念三千を指しているのである。「根なし草の波上……」も迹門の一念三千の形容であり二乗作仏の覚束無さを述べられたものである。

⑨本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顕す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。（定五五二頁）

⑨の文に於て、本門の一念三千を、本因本果の法門と呼んでいる。それは、法華経本門の寿量品にきて、今までの釈尊が、実は久遠実成の釈尊であると明かされたから、始成正覚ということは否定されてしまったのである。その仏を目ざして蔵・通・別・円・の四教の修行をしてきた菩薩達の仏道（四教の因）は無意味となってしまうから、そこで、爾前迹門の十界の因果を打ち破って、本門の十界の因果を説き顕わしたのである。これを本因本果の法門というのである。これに由って、九界も無始の仏界に具し（本因本果）、仏界も無始の九界に備わりて（本因本果）、ここに始めて真の十界互具・百界千如・一念三千が言えるのである。この仏界は、久遠実成の仏界なるが故に、ここで初め

て本門の一念三千が確立するのである。本因本果の法門が説かれたことにより、ここに本門の本果妙・本門の本因妙が示された。この本因本果論は日蓮聖人の最も重要な法門である。浅井円道先生は、この本因本果の法門を、次のようにまだ本門の「理」の一念三千法門の段階であると言われている。

開目抄では本門に立脚して衆生を本因によって価値づけ、九界に無始常住性を附与した。しかしながらこれらは、後に論じるように、日蓮の本分たる「事」に対する「理」の法門であって……[15]

の記述がそれに当たる。さて、本因本果の法門よりも勝れているのは『観心本尊抄』の「四十五字法体段」である。

今本時娑婆世界離三災一出二四劫一常住浄土。仏既過去不レ滅未来不レ生。所化以同体。此即己心三千具足三種世間也。（定七一二頁）

その理由は、「四十五字法体段」に本国土妙・本因妙・本果妙が説示されているからである。『観心本尊抄』と『開目抄』との本門の一念三千の法門の相違の大きな点は、この本国土妙が有るか無いかの違いであろう。『観心本尊抄』の次の文は、この証左を示す。

十界久遠之上国土世間既顕。一念三千殆隔二竹膜一。（定七一四頁）

一念三千、竹膜を隔てたりとは『観心本尊抄』と『開目抄』との「本門の一念三千」の相違を捉えているものと見ることができる。

さて、『開目抄』の中で、この本因本果の法門と関連する文が見えるのは左の文である。

雙林最後大般涅槃経四十巻・其外の法華前後の諸大乗経に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども応身報身の顕本はとかれず。いかんが広博の爾前・本迹・涅槃等の諸大乗をばすてゝ、但涌出・寿量の二品には付べき。

（定五五三頁）

右の「法身の無始無終はとけども応身報身の顕本はとかれず」の文は、一念三千との関係を指している。先きの本因本果の法門によりて、本門の久遠実成が顕れ、一念三千の本門の開顕が始めて基礎づけられた訳であるが、ここでは、その寿量品の仏がもっともっと人格化されてきているのである。それは応身・報身仏として表現化されてくるのである。これは正に法身・報身・応身の三身が無始無終として久遠劫来働きかけている、血の通った久遠実成の釈尊が私達の目の前に生き生きと活動しているのである。日蓮聖人は、常にその仏と倶に法華経を弘宣流布されてこられたのである。だが謗法罪によって国土は乱れ、また多くの者が地獄へ堕ちて行くことを現実に日蓮聖人は「深此をしれり。日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり」（定五五六頁）と叫ばれた。この事を知れる者とは、日蓮聖人の仏教全体の認識観である。日蓮聖人は、この認識観に立ち先に掲げた「日蓮が強義経文に普合せり」の行動があった。こういう見方こそが本門の事の一念三千の観心に他ならないのである。また、次の文にも事の一念三千義が見られる。

されば日蓮が法華経の智解は天台伝教には千万が一分も及事なけれども、難を忍び慈悲すぐれたる事をそれをもいだきぬべし。（定五五九頁）

日蓮聖人は随分と謙遜されて智解は天台伝教に及ばないと言われておられるが、逆に今度は、日蓮聖人の難を忍び慈悲の勝れている態度に対しては、天台・伝教大師の方が、とても自分達には真似ることはできないことだと恐れてしまうだろうと自信をもっていっているのである。その日蓮聖人の弘教態度とは、智解に止まらず、法華経の智解に随って命を懸けた行動である。この忍難慈勝の態度こそ事の一念三千の振舞であると言ってもよいのである。そして、日蓮聖人が鑽仰してやまない久遠実成釈尊（教相）と本門の一念三千（観心）の関係の文が左に見られる。

かうてかへりみれば、華厳経の台上十方・阿含経の小釈迦、方等・般若の、金光明経の、阿弥陀経の、大日経等の権仏等は、此寿量の仏の天月しばらく影を大小の器にして浮給を、諸宗の学者等近は自宗に迷、遠は法華経の寿量品をしらず。水中の月に実月の想をなし、或は入て取んとをもひ或は縄をつけてつなぎとどめんとす。天台云不レ識二天月一但観二池月一等云云。（定五五二―三頁）

「かうてかへりみれば」とは、まことの一念三千に対して見ればということを指す。又、「本果妙の世界を顧みるということだ」と捉える人もいるが[16]、その意は同じである。開迹顕本された本門寿量品の久遠実成釈尊に比べて他の仏（華厳経・阿含経・方等・般若・金光明経・阿弥陀経・大日経の権仏）は、天月・水月の関係となる。天の月が光りを出すから、水に月が映るのである。その映った仏が諸宗・諸経の仏を指し。本因本果の、まことの一念三千は本仏・久遠実成釈尊の実体をいう。本門寿量品の久遠実成の釈尊（教相）が顕れないと、まことの一念三千（観心）も顕れないのである。まことの一念三千の根底には一切衆生の尊敬すべき者の、主・師・親の三徳が完全に具備していなければならない。『開目抄』の冒頭文には、この主師親の三徳及び儒外内の三学の必要性を述べて、その掛かり合いの結論を一気に序分のところに論じているのである。その部分とは、同時に本門の事の一念三千の内容を端的に説示する②の文の「一念三千の法門は但法華経の本門の寿量品の文の底にしづめたり」（定五三九頁）と表明された所である。まことの一念三千と久遠実成の釈尊は密接不離の関係なるが故に、この三徳を備えた仏こそ、一閻浮提のまことの仏であり久遠実成の仏なのである。ここに、事の一念三千の人格性を持つ仏の具体性を顕わされたのである。この本門寿量品の久遠実成の仏と爾前仏（権仏）・迹仏の相違については後年、『富木入道殿御返事』（真蹟十三紙完）により一層鮮明に説示されている。それは左の文に見られ、これにて一目瞭然に知ることができよう。

法華経に又二経あり。所謂迹門と本門となり。本迹の相違は水火天地の違目也。例せば爾前と法華経との違目よりも猶相違あり。爾前と迹門とは相違ありといへども相似の辺も有ぬべし。所説に八教あり。爾前の円と迹門の円相似せり。爾前の仏と迹門の仏は劣応・勝応・報身・法身異ども始成の辺同ぞかし。今本門と迹門とは教主すでに久始のかわりめ、百歳のをきなと一歳の幼子のごとし。弟子又水火也。土の先後いうばかりなし。而を本迹を混合すれば水火を弁ざる者也[17]。

なお、制限枚数の都合上、以後の展開は次回へと続く。

（未完）

〔註〕

（1）拙稿「『開目抄』に現れた一念三千義について(一)」（『棲神』第六六号・四九―六八頁）参照。

（2）本文中に、または註にて（定五三五頁）等とあるのは『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻の頁数を示す。

（3）日蓮聖人は『法華経』の現文にて（定五四二頁）舎利弗等の十大弟子・五百・七百の羅漢・学無学の二千人・比丘尼等の成仏を論じているが、然し『華厳経』では、左の文の如く二乗作仏が否定されていると見られた。「華厳経云、如来智慧大薬王樹唯於二処一不レ能為二作生長利益一。所謂二乗堕二於無為広大深坑一……」日蓮聖人は、この文を解釈して次の様に言うのである。「此の経文の心は……此の大樹は火坑と水輪の中に生長せず。二乗の心中をば火坑にたとえ、一闡提人の心中をば水輪にたとえたり。此の二類は永く仏になるべからずと申経文なり」（定五四三頁）と。

（4）「大集経云、有二種人一。必死不レ活畢竟不レ能二知レ恩報レ恩。一者声聞 二者縁覚。……」の文をとらえて日蓮聖人は知恩報恩の立場から批判されて、二乗は「父母等を永不成仏の道に入れば、かへりて不知恩の者となる」（定五四四頁）と論ぜられているのである。

（5）日蓮聖人が『維摩経』の「一切塵労之疇為二如来種一。……已得二阿羅漢一為二応身一者終不レ能レ復起二道意一而具二仏法一也。如二根敗之士其於二五桑一不レ能二復利一等云云」（定五四四頁）の文を引用されたのは、すべての人には仏になる種がある。

但し二乗には、その種が疎かになっている。二乗の人よりも凡夫の方がまだ良いという内容から、二乗否定の文として挙げられているのである。

(6) ここでは諸経の引用経証の文を省略するのがいづれの経も（定五四五頁）に引用されているので往見されたい。日蓮聖人の引用の意を述べると『方等陀羅尼経』では二乗に仏種なきことを論じ、『大品般若経』にては二乗の菩提心の有無によりて成仏の問題を批判し、『首楞厳経』では煩悩の尽きた阿羅漢は破器のように成仏できないことを論じ。『浄名経』では二乗を供養すは三悪道に堕つ。等の内容を挙げられて二乗作仏の否定的な見解を示されたのである。

(7) 定五四七―八頁に見宝塔品・神力品・嘱累品の引用経文を挙げて、その二乗作仏の証明を論じているので往見されたい。

(8) 拙稿「『開目抄』に現れた一念三千義について」（『棲神』第六六号・六一―三頁）往見されたい。

(9) 定二九八八頁に「横一念三千　迹門　縦一念三千　本門」の表現記述が見られるのみである。ただし、この文にも「迹門の一念三千」の義が論述されているという目で見れば『開目抄』以前にも、以後にも多々あるのであろうが、明確に「迹門の一念三千」の固有名詞を挙げている箇所は少ないのである。

(10) 『開目抄』以外の五書とは（紙数の制限上、今その文証を一々示すことは省略せざるをえないが）文永九年五月二日作①『四條金吾殿御返事』②文永十年四月二五日作『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』（真蹟一七紙一帖完）③弘安元年四月二三日作『太田左衛門尉御返事』④弘安元年六月二六日作『富木入道殿御返事』（真蹟十三紙完）⑤弘安四年四月八日作『三大秘法禀承事』（親師本）但し此書は古来より現在に至るも真偽問題があるので要注意。また、義分に於て欠かせざるものには建治元年六月作の『撰時抄』（真蹟五巻一一〇紙）が挙げられる。

(11) 『太田左衛門尉御返事』定一四九七頁。『種種御振舞御書』（真蹟曽存・定九七一頁）にも諸法実相・本末究竟等を法華経の肝心と言う。

(12) 『始聞仏乗義』定一四五四頁。その他『智慧亡国御書』（真蹟完・定一一三〇頁）、『西山殿御返事』（定一二五二頁）往見。

(13) 法華経の心を述べる十界互具論の立場から二乗が成仏できなければ、菩薩はじめ他の界の衆生の成仏も有り得ないという主張は、二十一歳作『戒体即身成仏義』（定一〇―一一頁）、三十七歳作『一代聖教大意』（目師本・定七〇―一、七四頁）、三十八歳作『爾前二乗菩薩不作仏事』（真蹟身延曽存・定一四五―六頁）等にて早くから論じられている。また、久遠実成については三十六歳作『図録三・三種教相』（定二二二九・二二三六・二二五一頁）、『図録六・六凡四聖御書』（明師本・『開目抄』に現われた一念三千義について㈠（桑名）

『開目抄』に現われた一念三千義について㈡（桑名）

定二二五七頁）、三十八歳作『守護国家論』（真蹟身延曽存・定九四・九七・一二九・一三二頁）に初まって以後随所に論じられる所である。そして、一念三千の最初は『一代聖教大意』（目師本・定七一頁）に論じられその以後、確実なる遺文（真蹟等・允可書を除き真偽問題がない古写本）を点検して見て五〇箇所、その他の真偽問題のない写本に十一箇所、合せて六一の一念三千記述箇所を『開目抄』以前までに見ることができる。しかし、一念三千と十界互具の関係が的確に論述されていないのである。その関係を初めて明確に述べたのは『開目抄』の一念三千記述箇所である②の「一念三千は十界互具よりことはじまれり。」の文である。略開三顕一の十如実相、さらにそれを詳述する広開三顕一の仏知見の開示悟入。これらは十界互具論の立場から二乗作仏等が可能であることを論じているのである。尚、日蓮聖人遺文に略開三広開三を言及する所は『唱法華題目抄』（定二〇五頁）、『十章鈔』（真蹟・定四八九頁）、『開目抄』（真蹟曽存・定五五一・五六九頁）、『祈祷鈔』（真蹟曽存・定六七一頁）、『観心本尊抄』（真蹟完・定七〇四、七〇九頁）等に見える。

(14) 開示悟入の仏知見（広開三）が述べられているのは『開目抄』以前には余り見られない。『曽谷殿御返事』（定一二五三頁）、『三大秘法禀承事』（定一八六五頁）往見。

(15) 浅井円道稿「日蓮の遺文と本覚思想」（『本覚思想の源流と展開』所収）二九九頁。同稿二九七頁には、『観心本尊抄』の「四十五字法体段」（定七一二頁）には、本国土妙を含む本門三妙が説示されているので、さらに本門教学が明瞭化していると述べられる。

(16) 茂田井教亨述『開目抄講讃』上巻・一二九頁にいう。

(17) 『富木入道殿御返事』（真蹟完）定一五一八―九頁。同文は『教行証御書』定一四八七頁にも出づ。